

＜編集後記＞

本号が皆さまのもとに届く頃、桜のつぼみも大きく膨らんでいることでしょう。まずは本号が発刊されることに安堵しているところです。というのも、いささか大げさかもしれませんが、当学会誌編集委員会にとってこの1年間は、初めてづくめだったからです。

初めてづくめの一点目として、2014年4月より、学会事務局業務の外部委託が開始されたのと同時に、編集委員会の事務業務も同一業者に依頼することとなったということが挙げられます。これによって、編集委員会で昨年度まで自前で行っていた印刷・製本に至るまでの細かなチェックから解放され、より編集業務の中身に集中できる体制が整うはずであったのですが、やはり1年目は、従来の方法で培ったルールをどのように伝え、どのように継承し、または、どのように変更するのかといったことを委員会として決断しつつ徹底的に先方と打ち合わせる必要がありました。その結果、今年度に限っては業務が倍増したように思われます。おそらく、次年度以降には、よい効果が表れると期待しています。

次に掲載されている主要な内容についてですが、従来の投稿論文と年次大会報告に加え、研究担当理事が中心となって、成果を得ることができました課題研究について、本号のなかで一連の論文として公表することが、2014年7月開催の理事会で決定され、その準備にとりかかりました。執筆依頼に始まり著者校正に至る流れは、論文体裁こそ投稿論文とほぼ共通であるものの編集プロセスはかなり異なっており、初めての経験でした。

さらに、私事ですが、編集委員長が変更された1年目であるということも、筆者にとっては大きな出来事でした。もちろん、藤田前編集委員長をはじめ5名の編集委員の方々の全面的なサポートを頂いており、戸惑いや不安は全くありませんでしたが、学会誌の編集委員長という大役の重責を実感する1年となりました。

そして、初めてづくめの最後に申し上げることは、残念な結果についてです。ご覧になってお気づきの通り、本号で掲載に至った投稿論文は、わずかに1編でした。これはもちろん過去最低です。投稿自体は10編近くございましたので、掲載に至っていない論文が多いというのが実情です。学会誌の中核をなすのが投稿論文であるということは、言うまでもないことです。編集委員会では、年次大会にて投稿論文の執筆に関するワークショップを行ってまいりましたが、本号ではその集大成として、藤田前委員長に論文を寄稿していただきました。次号への投稿をお考えの皆様は、是非熟読なさってください。

以上のように、個性的な本号ではありますが、大いに活用されることを願っております。

編集委員会を代表して 笹金光徳